

子どもたちに誇れるしごとを。—— 第10回  
すみずみにまで人々の  
祈りを織り込んだ建造物群  
広島・中国地方編

10年後、20年後に出る  
“粗さの美学”

世界平和記念聖堂



外壁は、鉄筋コンクリートの柱と梁のあいだにコンクリートレンガを積み、レンガはあえて出っ張りを設け、目地は粗く仕上げている。松竹梅の花のデザインが印象的な聖堂の窓は、すべてが形の異なるスチール製サッシで造られた。人造石ブロックで美しく仕上げられたが、設計者から「銀行建築ばかりやっているので粗削りの美を知らない」と注意され、ノミ切りの粗いタッチに変更した。建物の美しく老いた姿を見てほしいという設計者の思いの表れでもある。

エポキシ樹脂で  
形を維持する

原爆ドーム(保存)

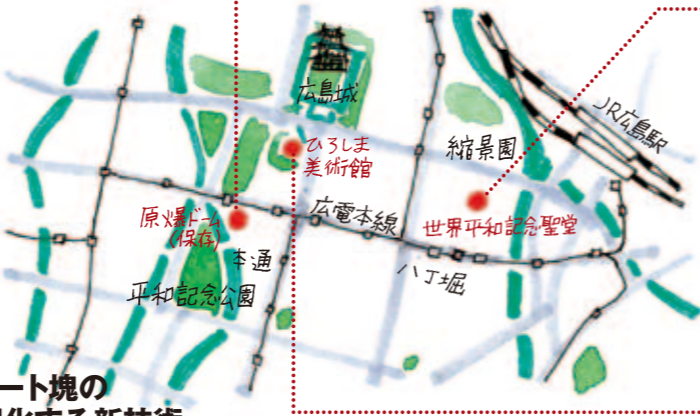
広島市が原爆ドームの保存工事に着手したのは1967年。清水建設は保存手法の研究調査にも協力し、建物のひび割れた個所にエポキシ樹脂を接着剤として注入する「穴あきパイプ使用による接着剤の圧入工法」を考案した。試験施工による接着剤の材料強度、接着強度、粘度などの選定を経て、細い枝状の亀裂のすみずみにまでエポキシ剤を注入する補修工事を完了した。



貴重な美術品を  
守るためのガス削減技術

ひろしま美術館

海外の専門家の評価は、印象派絵画コレクションでは東京の国立西洋美術館、ブリヂストン美術館、倉敷の大原美術館に勝るとも劣らない。貴重な美術品を守るため、コンクリート躯体と建築仕上げから発生するアンモニアガスを「枯らし期間」と呼ぶ未使用期間を設けて十分に換気し、残留濃度を下げた。現在では、アンモニアガスの発生量を普通コンクリートの約10分の1に削減できる「アンモニアレスコンクリート」が清水建設によって開発されている。



巨大なコンクリート塊の  
打ち込みを合理化する新技術

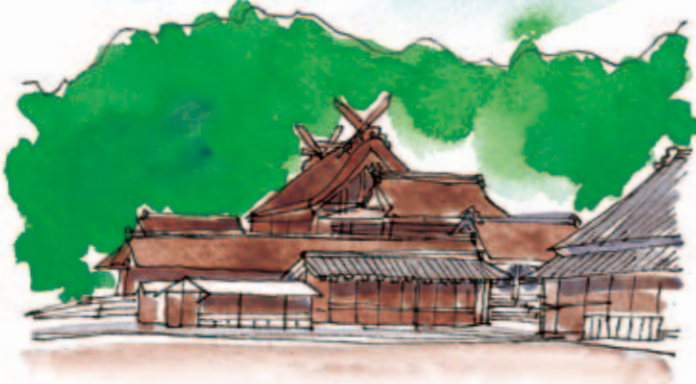
本州四国連絡橋 因島大橋

吊橋のケーブルを陸地側で受け止める「橋台(アンカレイジ)」。縦41m、横62m、高さ51mという大きさと、鉄筋を組み入れた約5万㎡の巨大なコンクリートの塊は、小さなダムに匹敵する。コンクリート打ち込みの合理化とひび割れ防止の品質管理のために、独自の打設工法を採用。海岸際の橋脚基礎の施工には、清水建設が開発した水中コンクリート打設工法ナックスが採用され、約2万㎡のコンクリートを打設した。

60年に1度の  
大改修がスタート

出雲大社(保存修理事業)

出雲大社の本殿は、屋根面積が600㎡という檜皮葺きの神社としては日本最大級の大きさ。修理は、大屋根を覆っている厚さ30cm~1mほどの檜皮葺きを剥がし、檜皮の葺き方や、下地材の構造や傷み具合を調べることからスタートした。他の社殿も順次調べ、木材に再使用不可能な腐朽が見られた場合は、代替の太材を求めて国内中を探索する。



中国地方には、日本の祈りの原点がある。年間約200万人の参拝者を迎える島根県の出雲大社だ。今、2013年の竣工をメドに、本殿をはじめとする14建造物で60年に1度の補修・保存事業が行われている。1744年に完成した本殿は国宝であり、ほかの13の建

物はずべて国の指定重要文化財である。重責を担ったのは清水建設だ。社寺担当の技術者には夢のような仕事であるが、求められる緊張感は、生半可なものではない。ほかでもない、建築物は、人びとの祈りの本質を具現しているからだ。それを守り・遺すには、祈りの本質を理解したうえで、次世代へつなぐための生命を注入しなければならぬ。

1978年に、広島市中央公園内にオープンした「ひろしま美術館」もまた、被爆の街に芸術文化の潤いをもたらすために設けられた。愛とやすらぎのために、をテーマにこの年創業100周年を迎えた広島銀行が地域とともに歩んだ歴史の記念事業として、建設された。絵画を通しての平和への願い。それを理解できる者に建設を託したい。清水建設が指名されたのは、決して偶然のことではなかった。

1983年12月、瀬戸内でも最も多島美に映える尾道の沖合5km、向島・因島間にかかった本州四国連絡橋初の吊橋、因島大橋。本州と四国を結ぶという夢と願いは、清水建設によって造られた巨大なコンクリートブロックのアンカレイジ(橋台)によって守られている。

広島は祈りの街である。同時に、建築とは、人々の願いを本質的に表現する営みであることを教えてくれる街でもある。清水建設は、広島を中心とする中国地方において、平和への祈りと未来への希望を託されたさまざまな建造物を造り、守り続けている。

文：船木春仁 絵と地図：なかたえり デザイン：大久保正幸事務所